

ウクライナ：もしポロシェンコが攻撃すれば、彼はそれで 終わる

【訳者注】読者のコメントを見ても、ポロシェンコは一般に最も悪辣な傀儡とみなされ、The Saker も、用済みになったらアメリカによって始末されるだろうと見ている。そのポロシェンコへの支持を表明するために、安倍首相はわざわざキエフまで会いに行かざるをえなかった。いま日米安保の集団的自衛権を急いで認めようとしているのも、これと関係があるだろう。ただ、今のところ、わが国はアメリカの **vassal state**（従僕国）としての立場を甘受するよりほかない。この自衛権は、アメリカからは容易く集団的自衛義務と読み替えられる恐れがある。アメリカに自衛の戦争などというものはない。9・11後に言われた「テロとの戦い」は、世界を騙すためのスローガンだった。自衛以外の戦争は戦争犯罪である。戦争犯罪の片棒は担がないという毅然とした態度を、我々は示さねばならない。

By The Saker
July 20, 2015



- ・東ウクライナ反政府軍は、かつてこれほど軍事的に強かったことはないというこの時期に、予想に反して平和への関心を示している。
- ・これは、ナショナリストやアメリカに要求され、不可避免的にキエフ政府が攻撃してきたとき、反政府軍を責めることができないようにするためである。
- ・その後で、反政府軍は、キエフ政府の攻撃を無力化し、反撃に出ると考えられる。
- ・その時点で、ポロシェンコが権力を保持できているとは考えられない。
- ・問題は、彼に取って代わった者が、平和派か、彼以上の戦闘派であるかである。

ドネツクおよびルガンスク人民共和国を代表する「ノヴォロシア」のトップの高官たち（ザハルチェンコ、デイネゴ、およびプーシリン）は、合同記者会見を行い、彼らは、前線から少なくとも 3 キロ以上離して、100 ミリ口径までのすべての兵器を引き上げると公的に宣言した。（より重い口径の兵器は、“ミンスク 2 合意”（M2A）に従って、すでに引き上げられていることになっている。ノヴォロシアは応じたが、キエフ臨時政府は応じていない。）
<http://www.rt.com/news/310201-lugansk-rebels-weapons-withdrawal/>

それより前、ノヴォロシア側はすでに、同じような一方的な行動によって、シロキノの町から 1 キロ以上、すべての彼らの軍事力を撤退させた。予想した通り、政府側は同じ行動を取らず、そのままの位置を保った（が、あえてシロキノに侵入することはなかった——少なくとも私の知る限り。）

しかし今度の場合は、キエフ政府は、新たなノヴォロシアの“善意のジェスチャー”に対し、前例のない激しい砲撃を、やはり一晩ぶっ続けに、ドネツク市に浴びせてきた。

いったいどうなっているのか？ ノヴォロシア側は突然、狂ったのか？

とんでもない。

実は、彼らは、非常にエレガントな罠を、ポロシェンコと彼を加勢する西側の者たちに仕掛けていたのだ。それを説明しよう。

政治的レベル：

政治的レベルにおいては、ノヴォロシアは、誰でも聞く耳をもつ者に対し、M2A の規定すべてに本当に従っていることを証明するために、後ろへ引く構えを取っている。

問題はもちろん、西側の誰も聞く耳をもたないことだ。これに応じて、ノヴォロシア側は、西側のリーダーたちが、単純な根拠、つまりノヴォロシアは M2A に応じているが、臨時政府は応じる気配もないという根拠によって、事実を無視することが次第に難しくなるような、率先行動を増やしていこう。

ザハルチェンコ、デイネゴ、およびプーシリンが、これを通告するや否や、ラヴロフはシュタインマイヤー（独外相）に電話して、ノヴォロシアは可能な限りあらゆる努力をしている、今こそポロシェンコはこれに見習うように、プレッシャーをかけるべきだ、と言った。

ところで、もちろんのこと、ラヴロフは、シュタインマイヤーがアメリカの傀儡であり、ア
ンクルサムの命令に従うことを知っている。もっと重要なことに、ラヴロフは、ポロシェン
コが M2A を実行できないことも知っている。しかし M2A が合意された以上、ロシア政府
は今、ウクライナ政府がその取り決めに従うことができるかのような、ふりをしているの
であり、彼らと彼らの BRICS/SCO（上海協力機構）同盟国が、マントラのように、「ミン
スク 2 合意こそがこの紛争を解決する唯一の方法だ」と繰り返すようにすることができる。実
際、もちろん M2A こそ、ウクライナで政権交代を達成する最上の方法である。なぜか？

なぜなら、ポロシェンコは M2A のどの点をも実行していないが、彼はすでに、極右「ライ
ト・セクター」やいろんなナショナリスト党から公然と攻撃され、寡頭政治家やノヴォロシ
アと決然と戦わないとって非難されている。

西ウクライナの政情はいま、恐ろしく深刻であり、ドミートリ・ヤロシュは、キエフの政権
を公然と「裏切り者」と呼び、多数のウクロ - ナチ殺し屋部隊に対し、ポロシェンコへの反
乱と、彼の命令に背くことを呼びかけている。

ポロシェンコはおそらく、もう一度、大規模な攻撃をノヴォロシアに仕掛けて、愛国心を証
明しようとするだろうが、問題は、これはすでに過去 2 回とも失敗しており、ノヴォロシア
はこれまでになく強力になっていることである。

軍事的側面：

全面的な敵対行動を再び始めるかどうかは、その時にならないとわからないが、ノヴォロシ
ア軍が、分散した民兵団から統一された正規軍へと見事に変貌したことについては、強力な
証拠がある。

このことは、彼らが潜在的に、戦術的な勝利から作戦レベルの反攻へと能力を高め、キエフ
政権にとって、大きな脅威となる可能性を秘めているということである。

彼らは明らかに、十分な兵力を集めることができ、装備は“万全”であると公言している。
彼らの指令や統制もそうであってほしい（以前は恐ろしいものだった）。

もっと明らかな事実は、ノヴォロシアのリーダーたちが、どんなウクライナ政府の攻撃をも
押し返すだけでなく、逆襲して大打撃を与える彼らの能力に、明らかに自信をもっているこ
とである。ザハルチェンコはそれを何度も公言している。時の運は常にノヴォロシアの側に
あり、今それはついに報われつつある。

ノヴォロシヤの自信が最も明らかに表れているのは、ノヴォロシヤは情報活動によって、臨時政府側に現在、7万の兵がいて、境界線すべてに重装備と重火器が配備されていることを突き止めたが、それでも彼らは一方的な撤退を、自分から始めたという事実である。

その上、ノヴォロシヤ側はこれまで、臨時政府側の攻撃があるかもしれぬ軸に沿って、注意深く戦略的地勢を準備する十分な時間があった。もし彼らがそこを攻撃すれば、注意深く準備された砲火ポケットにつながり、彼らは破壊されるだろう。

また私の想像だが、ノヴォロシヤは、彼らの機動性と砲火の連絡性を劇的に進歩させ、どんな攻撃にも、はるかにより容易く応戦できるようになった。

したがって現実には、こういうことになる——ノヴォロシヤ軍は、彼らが一方的に後退しても、実はあまりリスクを負うことはない。実は彼らは、うまい政治的宣伝と、健全な軍事戦略を巧みに組み合わせたのである。

ポロシェンコのジレンマ

ポロシェンコは恐ろしい立場に立っている。ウクライナ経済は基本的に死んでいる。救うことのできるものは何も残っておらず、この潮流を変え、経済危機を乗り越えることなどできない。

極右「ライト・セクター」が武装蜂起していて、かんかんに怒っている。西ウクライナの人々はすでに、彼ら自身の特別の自律的体制を真剣に求めている。Saakashvili が治め、Egor Gaidar の娘が副知事をしているオデッサは、必然的に爆発するだろう。特にアメリカが公的に彼らの給料を払っているからである。https://en.wikipedia.org/wiki/Maria_Gaidar

ポロシェンコが Rada（人民議会）に登壇するときには、彼はタフさを装わねばならない、つまり M2A に従って実行すると約束したことの、正反対を言わねばならない。しかしホワイトハウスでさえ M2A が唯一の解決法だと認めているのだから、ポロシェンコは、昼間は平和主義者のように見せかけ、夜はヌーランドの狂気じみた命令を実行するという、クレージーな立場に立たされている。

もうそろそろ、ポロシェンコは、自分がアメリカに捨て駒として利用されていることに、おそらく気づいているだろう。彼がノヴォロシヤ攻撃を命令するように強制され、この攻撃が失敗するとき、彼はそのすべての責任を負わされるだろう。

なぜアメリカは、そのような攻撃がもう一つの敗北に終わることがわかっているにもかかわらず、ポロシェンコに攻撃を命ずるのだろうか？ 2つの理由がある——ロシアが介入するかもしれないという（今は仮説になった）期待と、もう一つは、それがポロシェンコをお払い箱にする完全な方法だからである。

当然ながら、ポロシェンコは権力を失いたくなく、おそらく死にたくもないだろう。だから彼は、その劇的な結末を避けようと最善を尽くし、一方で、自分の“愛国精神”と軍事的“威信”を証明するために、ドネツクとドンバス地区の諸都市を砲撃しつづけているのである。

問題は、このような砲撃による“解決”は、ノヴォロシヤの軍事力を弱めるのに何の役にも立たず、ノヴォロシヤの人民を更に激昂させるだけということだ。

攻撃が始まったら

そこで、おそらく避けられない攻撃がいよいよ始まったとき、どうなるか？ 私の推測では、ノヴォロシヤ軍は迅速かつ効果的に反撃し、おそらくマリウポリと/またはスラビャンスクに向かって直ちに反攻に出るだろう。

この時点で臨時政府側は、再び敗走し、その西側パトロンに、ノヴォロシヤ軍を止めてくれと懇願するだろう（ミンスク1・2以前の場合と同じように）。

オバマとケリーはきっと又しても、すべてロシアが悪いのだと厚かましくも言うだろうが、ヨーロッパでは、エリートたちは完全な恐慌モードに入るだろう。それは“彼らの”あの男がM2Aを破って、自分から攻撃を始めたというだけでなく、ノヴォロシヤの反撃の深さの可能性におそらく恐怖を感じるだろうからである（彼らの最大の恐怖は、海岸沿いのクリミア半島への回廊である）。

サルコジが2008年に、ロシア人がトビリッシに入らないように懇願するために、モスクワに出向いたことを、覚えておられるだろうか？ 同じようなことが（メルケルとオランダがサルコジの役を担当して）再び起ったとしても、私は驚かない。

そして再びプーチンが、ノヴォロシヤ軍に対し、もうやめよと言うだろう。しかし彼らが占領する戦略的地勢は、デバリツェボがそうだったように、彼らの手に残るだろう。誰もがそれを認めざるを得ないだろう——いかに不本意でも。その時点で、キエフの政権は完全に瓦解するものと私は予想する。では誰がそれにとって代わるか？

政権交代は確実！ だが何を指して？

ここには2つのオプションしかないように思う。一つのオプションは、「ウクライナを救い」「平和を取り戻す」ための軍事クーデタである。

それは、ウクロ - ナチ実験全体の事実上の終わり、プーチン・プランの基本的な受容という結果になる——すなわち、憲法によって保障された自己決定権をもつ、脱中央集権的な、単一の、中立的ウクライナである。

もう一つのオプションは、公然たるナチ体制のライト・セクターの [ステパン] バンデラ党といろんな殺し屋部隊である。正真正銘のナチスによる権力掌握は、もちろん、ウクライナという一つのことを再びバラバラにする過程を再スタートさせるにすぎず、これもロシアの観点からすれば、一時的に受け入れられる結果である。

ロシアは、恒久的な、一体化したロシア嫌いの“バンデラスタン”を、自分の国境沿いに持つのは嫌なことだが、ウクライナを、さまざまなウクロ - ナチ集団による“支配ゾーン”に分けることは、ロシアにとって何ら危険となるものではない。

私は、ロシア（と、もちろんノヴォロシヤ）にとって最悪の体制は、現在の体制だと言いたい——すなわち、一つのウクライナが、完全に非道徳的な、背骨なしの寡頭政治家に支配され、ヴィクトリア・ヌーランドの子分たちが要所に配置され、EU/IMF/WBなどの公的な承認とサポートを受けているような状態である。この構図は、ロシアを脅かす明らかに最大の潜在可能性をもつもので、それはすでに現に、毎日、ノヴォロシヤの人々を殺している。しかし、もしウクライナが、リビアやイラクの“民主主義モデル”に従うとしたら、そのときは、ロシアよりもEUにとって、はるかにより大きな問題になるだろう。

プーチンとザハルチェンコにはたっぷり時間がある

“ウクロ - ナチ・ウクライナ”はすでに、これまでに十分の自己破壊の経験をしてきたので、プーチンとザハルチェンコには十分な考える時間があった。

彼らは今のところ、臨時政府軍による、ノヴォロシヤに対する、大いに予想される破れかぶれの自殺攻撃に備えること以外に、何もすることがない。

万一それが起れば、ノヴォロシヤは直ちに、しかも迅速に、可能な限り深く反撃し、それか

ら再びこれを中止し、「我々はウクライナの領土的純粋さを支持する、しかしこの物が崩壊するとしたら、こうすることはやむを得ないのだ」というマントラを再開する。

オバマとケリーは、もちろん、ロシアがやったと非難するだろう。しかし絶対に何もやっていないことを、誰がいつまで非難できるだろうか？

ノヴォロシアの人々は不幸なことに素直に聞けない

これまで最もつらい状況に置かれたのはノヴォロシアの人々で、彼らは、自分たちの家や学校や病院に爆弾が落ちているときに、時は“彼らの”側についているという説を、慰めとして聞くことはできなかった。彼らにとっては、この恐怖の一刻一刻が、いま止めさせねばならない非常事態であった。状況はいま、ナチ占領下にあるウクライナでさえ、実に醜悪なことになりつつある。ある有名なウクライナのブロガー（現在はロシアに亡命中）の次のビデオをご覧いただきたい。ここで彼は（Kolmoiskii と Yarosh の）Ukrop 党が、票を獲得するために食物を配給していると報告している：——

（英語字幕を出すためには、c c と押してください）

<https://youtu.be/SODBbBnICbU>

恐ろしくないだろうか？

そしてこれが、ますますひどくなる一方なのだ。政治的に、経済的に、社会的に、ウクライナは死んでいる——まだ体は暖かくても。

政権交代が起り、そこから脱ナチ化が不可避免的に起こって、長期的で大規模な国際的安定化と再建プログラムがそこに伴ったときに、初めてウクライナは、究極的にゆっくりと、ある程度の正常さを取り戻し始めるだろう——それも、ロシアがこの努力に大きな役割を果たしたときだけである。

このような結果は、“帝国” [アメリカ] にとっては絶対に受け入れられないことなので、ウクライナは、コソボやリビアやソマリアのように、“ブラックホール”であり続けるだろう。これらの国はすべて、殺し屋やマフィアの親分に支配される、体をなさない惨めな貧乏国である。そのような理由で、この国がいくつかのより小さな部分に分裂するということは、あらゆる人にとって、特にウクライナ人自身にとって、おそらく、悪いオプションでも最もましなものであろう。

一つの大爆発か、いくつかの小爆発か？

あなたが部屋 A にいて、100 グラムの TNT 爆弾が一度に爆発するか、あるいは部屋 B にいて、20 グラムの TNT が 5 回断続的に爆発するか——いくつかは爆発しない可能性もある——どちらがいいかと言われたら、あなたはどのようにするか？ 選択は言うまでもないだろう。同じことがウクライナについても言える。

大陸全体にとって危険はるかにより少ないのは、ウクライナがいくつかの部分（例えば、ドンバス、中央、南、西など）に分割される場合であり、この方が地方住民にとってもはるかに有難いかもしれない。

ひとつには、いくつかの部分が、他よりはるかに生きる力をもつからである。それらはまた互いに非常に異なっている。そして現在の境界線をもつウクライナは、レーニンとスターリンの創造物であり、どちらにしても歴史的に根拠はないのだから、分割というのが、この人工的な存在を遮二無二生かそうとするよりは、はるかに安全で、より自然なやり方かもしれない。

イデオロギー的に見れば、ウクライナというのは空想的なアイデアである——大きな、猛々しく反ロシアの国家が、ヨーロッパの残りの者たちを、ロシアの貯蔵庫から“保護している”のである。結構だ！ しかし、人がそのような計画の実践性を眺め始めると、これはひどくロシア嫌いの西側の宗教的・政治的エリートの、病的な頭の中で生まれた、狂気じみた考えであることが直ちに明らかになる。

唯一の問題はこうである：——西側の金権政治家は、彼らの創ったこの怪物をあきらめることに合意するだろうか？ その答え次第で決まるのは、ロシア人の未来でなく、おそらくヨーロッパの未来である。